

平成 12 年度霧多布湿原学術研究助成 研究報告（速報）

研究課題名： 霧多布湿原及び浜中町の音環境予備調査

「人と自然の豊かなふれあい」を耳から診断するために

担当者： 大庭 照代（千葉県立中央博物館）

自然の音は、環境についての重要な情報を含んでいる。なかでも、鳥のさえずりや川のせせらぎは、「人と自然の豊かなふれあい」を求める市民の間で取上げられる代表的な自然の音である。しかし、これらに耳を傾けることによって市民が自分の耳で環境を評価できるためには、少なくとも2つの問題をクリアする必要がある。第1に、市民自身が音を聞く力を身につけ、互いに音について情報を確実に共有できる方法を体験的に獲得していくことである。第2に、地域の音環境構造についての理解を深めるための基礎資料を準備し、市民がこれまで見るができなかった音の世界を見る楽しみを支援することができるような録音や音声分析などによる資源の提供を行うことである。これら2点について、本研究助成の成果概要を以下にまとめる。

1) 市民の聞く力

市民が霧多布湿原および日常暮らしている浜中町内において聞いて心にとめている夏の音に関して、アンケート調査を行った。地元の霧多布中学と霧多布高校等の10代の生徒を中心に、霧多布湿原センターを訪れた一般成人を含め、279人の回答を得た。調査の目的は、①市民の聞く力と表現力などを見ることと、②今後の音環境調査を行う上で必要な情報として、市民の音を聞く行動圏等を知り、今後の調査地点を策定すること、③自然の音および音環境についての関心を探ることにあつた。回答を概観すると、調査者自身（千葉県在住）が知らなかった地域に固有な音が地元の中学生や高校生にある事を発見した一方で、湿原の音については今後さらに聞いてもらう工夫が必要であること、音環境への漠然とした関心があること、調査については面白そうであれば参加したいという気持ちがあることなどがわかった。霧多布湿原センターで行われた豆講座は、町の行事と日付が重なり、職員の方ガ中心の特別講座になってしまった。代わりに、散布中学では生徒が互いに音情報を共有できる具体的方法としてサウンドマップを使った特別授業をすることができ、今後の調査に不可欠な教育プログラムについて、データを得ることができた。報告書では平成12年度に行われた千葉県内外での同様な活動データとあわせて、教育プログラム（案）を提案する。

2) 地域の音環境構造

平成12年7月3日から11日までの間、霧多布湿原を中心に浜中町内を訪れ、特徴的な景観について32地点選び、それぞれについて音環境録音と現場における音源の聞き取りを行った。これらの録音から、音環境の構造を視覚的に把握できるように、音環境ソナグラム（音環境の声紋）を作成し、地点の音環境区分を行った。また、音環境の音源構成を調べ、地点ごとのリストをつくるとともに、7月の上旬の湿原に特有な自然の音を概観した。これらは湿原の音環境を評価する上で基本資料となるもので、上記教育プログラムを浜中町で行っていく上で参考資料として必要不可欠であるが、今後充実させる

べき資料である。